世界の地方都市「東京」の学生に送る留学のすすめ

理系、複合・融合系人材コース　第１期生　肱岡厚志

所属：都市教養学部理工学系物理学コース

留学時学年：学部３年

留学先：ベルヴューカレッジ（アメリカ）

実践活動：投資ファンドでインターン

僕は、文科省トビタテ留学 JAPAN 第１期生として３年生の秋から１年間休学しアメリカ・ワシントン州・シアトルでビジネス・政治を中心に大学で勉強し、夏休みには投資ファンドでインターンをした。他の多くの留学経験者が海外留学は楽しいという内容の記事を書いているので、今回の留学体験記では、留学の経緯と経験を踏まえて、留学をすることによって見えてきた日本の姿について書きたいと思う。

1. 日本に来る外国人

まずは留学前の話である。入学当初から留学に興味を持っていたので、大学１年時から外国人学生といくつかの接点があった。１つが国際センター主催のグローバルシチズンシッププログラム*という１年間のプログラムである。首都大生をグローバル化させようという趣旨のプログラムで、外国人留学生との交流機会が豊富にあった。例えば、僕は茶道研究会に所属していたので、首都大に来ている留学生向けに茶道を披露するイベントなども行った。述べ 100 人近くの留学生にお茶を出したと思う。中国、韓国などアジア人、ドイツ、オーストリアなどのヨーロッパ人などの多くの外国人に接してきて、彼らは日本に強い関心を持っており文化・技術に対して尊敬を持っているという印象であった。

（*平成２５年度まで実施）

2. 日本に来ない外国人

それでは、留学中の話である。留学中ではビジネス・政治の授業や、インターンシップなど様々な経験ができた。今回は政治学の授業の話をしたい。この政治学の授業では模擬国連という活動をしていた。模擬国連とは、学生がある国の大使になりきり国連でのディベート・ディスカッションを模擬的に行う競技であり、全米大会は国連の本部で行われ、アメリカでは非常にポピュラーな競技である。幸運なことに、学校代表のチームに選ばれ、世界中から選ばれた学生が集まる模擬国連の NY での全米

大会に出場することができた。4 泊 5 日朝 9 時から夜 22 時まで会議があり、3,000 人以上が参加する大会で、僕自身も 200 人以上と話し合う機会があった。トビタテ留学 JAPAN プログラムとして日本に対するイメージをヒアリングしなければならなかったので、多くの学生に話を聞いたところ衝撃的なほど日本のプレゼンスは低かった。まず、日本の大学は知られていない。辛うじて知られているのは東大くらいで学歴のプレゼンスは皆無である。次にテクノロジーに関しては、「日本車は丈夫」以外にイメージがない。医薬系の学生が iPS 細胞について少し知っているくらいである。一方で、地震、原発事故、少子高齢化などはよく知られていた。日本に来る学生は日本に対して興味を抱いているが、アメリカに 1 年間いた感覚からすると特にそのような人々は今のところマイノリティーである。もちろんそれは、僕たちの世代がどう活躍するかにかかっている。

全米模擬国連大会 NY2015 ニュージーランド大使館にてチームメイトと

3. 泥船を作り変えるか捨てるか

ニューヨークであったドイツの学生が面白いことを言っていた。彼は、ロシアで生まれでエンジニアを経て、現在はドイツで EU の法律・特許について学んでいるそうだが、大学に戻ってきた理由は祖国を常に捨てる準備をするためと言っていた。そしてその言葉に、周りにいる多くの学生が賛同しているのが衝撃的だった。彼等は優秀で各大学の代表としてやって来ていて、その彼らがコンセンサスとして国を捨てる覚悟があると言っているのだ。もしも祖国の政治・生活に不満があるのなら、必要に応じて高等教育を受け直し、海外に留学して、いつでも国を出られるようしたたかに行動している彼等に感心してしまった。ここで日本を振り返って見ると、日本の産業的なプレゼンスは落ちており、少子高齢化問題など今の学生にとってお先は真っ暗である。自分たちの世代の選択肢は、この国を作り変えるか捨てるか等の選択肢があると思うが、今その準備を行い、能力を高めるにはどうしたら良いだろうか。僕が仮に日本で今後７０年、グローバル人材と言われる要素なしで生きていけるかと問われれば難しいと思う。

1 年間の留学はとても楽しいものである。しかし、楽しい以上に留学を通じて海外のスタンダードを知り、今の自分の状況を客観的に顧みることができる。すると、世界の中の地方都市でいかに怠惰で危機的な生活をしているのかと気付けると思う。